

保育者養成に関する一考察

——卒業生を対象とする現職研修会「三びきのこぶた会」の歩み——

金勝 裕子* 清水 玲子* 赤井美智子*

(1990年11月1日受理)

<研究目的>

十文字学園女子短期大学の幼児教育学科の卒業生を対象とした、現職研修会（名称：三びきのこぶた会）の、過去4年間の実践活動記録を分析・整理することにより、この会の果してきた、機能や運営上の特色、内容の特色などを、考察することを目的とする。

<本研修会の概要>

本会の歴史

この研修会「三びきのこぶた会」は、昭和60年10月本学の教員、坪倉紀代子（身体表現）、金勝裕子、清水玲子（音楽表現）の三人で、保育現場と保育者養成校の間をより密接にするためにどのようにしたら良いかなどを検討する。その結果、定期的に卒業生を対象とする研修会を開くことを計画した。そこでは、現場のかかえている問題や、実体を把握し、それを学生への教授内容に生かし、また、現場へ新しい教材などを提供し、その現場での実践報告を研究発表したり、更に発展させることにより、保育者の資質を高めることのできるような会を作ることを提案し、次のような働きかけを行なった。

昭和61年4月、過去10年間に渡る卒業生（昭和51年度～60年度）約1700名を対象に、現職研修会「三びきのこぶた会」の案内を送る。

それに対し、返信された入会申込み者は、昭和61年5月の段階で、183名であった。

開催日と、参加状況は下記の通りである。

○第1回	昭和61年5月31日	参加者	37名
○第2回	“ 7月12日	“	38名
○第3回	“ 9月20日	“	28名
○第4回	“ 11月29日	“	20名
○第5回	昭和62年1月31日	“	28名
○第6回	“ 5月31日	“	57名
○第7回	“ 7月11日	“	36名
○第8回	“ 10月22日	“	35名
○第9回	昭和63年1月30日	“	23名
○第10回	“ 3月12日	“	59名

*幼児教育学科

○第11回	昭和63年5月28日	参加者	18名
○第12回	“ 7月9日	“	30名
○第13回	“ 10月29日	“	47名
○第14回	平成1年2月18日	“	26名
○第15回	“ 3月4日	“	17名
○第16回	“ 5月20日	“	75名
○第17回	“ 7月8日	“	47名
○第18回	“ 10月28日	“	51名
○第19回	平成2年1月20日	“	37名
○第20回	“ 3月3日	“	39名
○第21回	“ 5月26日	“	79名
○第22回	“ 7月14日	“	49名
○第23回	“ 10月27日	“	63名
○第24回	“ 1月26日	“	53名
○第25回	“ 3月9日	“	32名

以上のように、年間5回のペースで、研修会を開催し現在26回を迎えようとしている。現在の会員数は、566名を有している。（平成3年3月現在）

本会の趣旨

この研修会は、創設時に、次の二点を目的として発足する。

① 幼児の表現活動の研究、保育者間の研究・研修
幼児の音楽（金勝・清水担当）と、体育系（坪倉担当）を中心とした表現についての研究および保育者間の研究・研修を目的とし、保育技術を開発していくための相互研修の場とする。現在は、研究、研修分野は、表現活動を中心としつつも、より広い分野に広がり、心理面では2年目より本学の教員、赤井が担当するようになる。

② 卒業生へのアフターケアへの活動

同窓の現職保育者の連帯、相互交流を深め、又、情報交換の場を提供することにより、保育者の資質をよりたかめることを目的とする。

<本研修会の機能>

① 卒業生が不安の強い初心者時代をのりこえて、途切

れることなく中堅者へと育てて行けるように、定期的な研修の場を提供する。そこでは研修を受けたり、仲間同士話し合い、お互いに励みあいながら、自ら抱えている問題や悩みの解決の糸口をつかむ、支援の場となる。そのことにより長い期間、保育者の仕事に従事して行ける様に卒業生をフォローして行く。

② さまざまな教材を提起し、現場での応用・実践のための可能性をさぐる。

日々の保育に忙しく追われている保育者にとって、自分自身で新しい教材を探し研究することは、困難を供うものである。そこでこの会では、新しい歌・よく聞かれる歌・季節の歌、また行事に即した歌や表現活動、そして保育の中での表現活動や合奏など、さまざまな教材を提起することにより、保育者の音楽への関心を高め、現場の実践へと生かして行く。

③ 会員が教材の実践をし、その応用を互いに報告し、活動内容の交換をしあうことにより、それらの内容をふくらませ、発展させて行くことができる。また他園でのアイデア及び応用を活用し、保育へ生かして行くことができる。

さらに、教員もそれらを現学生への講義内容に還元することができる。

④ 行為法・心理劇を導入した保育者の資質訓練を行なう。そこでは、保育場面のみに限定されないさまざまな場面設定において、参加者は感じ、考え、ふるまう体験を重ねることにより、関係認識を深め、創造性・柔軟性を高めることができる。

行為法・心理劇とは、さまざまな場面で即興的に“いま、ここで、新しく”ふるまうことのできる自発的・創造的な人格形成がめざされる臨床・教育分野の理論・技法である。そこでは、講義で外接的に得た知識や技法を“いま、ここ”のさまざまな場面に生かして実践的にふるまうような認識と行為を統合する訓練が可能である。

学生時代に学科の授業の中で、ふるまいながら考え、考えながらふるまう心理劇の基礎体験をしているので、この会では、より集団状況把握や対人関係洞密が深まるような、行為・情緒表現レベルばかりでなく認識レベルに重きを置いた課題設定も時に応じて行なっている。

⑤ 参加者全員で音楽にのり、全身で音楽を楽しみながら研修ができる内容を含んでいるため、精神衛生上のリフレッシュやレクリエーション的効果、時にはストレス解消などの発散をする役目を果たしている。

これは参加者である会員が、時には保育から離れた所

で、自己を発散すると同時に、自分を出しきって表現を見つめ直す大切な研修の機会になる場であり、自己鍛錬の場でもある。

⑥ 時間外（会終了後あるいは開会前）には、必要に応じて、個別臨床相談活動を連結している。このような活動は、始めから予定されていたものではなく、回を重ねていく過程で、個別相談課題に取り組める時間帯が必要に迫られ確立されてきた。

相談内容は、次の3つに分類でる。

- a. 会員の所属するクラスの乳幼児に関する臨床・発達相談
- b. 会員自身の精神衛生相談
- c. 職場環境・職場選択に関する問題の相談

この会は、年5回開催されるので、相談活動は数回に渡って継続することが可能であり、数ヶ月の間のさまざまな変化を相互に明確にしながら相談課題の先への発展を探る活動を展開できる。

⑦ 先輩・後輩・同輩の相互交流を促進する。

保育という専門職に関するさまざまな情報交換や相互研鑽のためには、異年齢の会員同志の相互交流が不可欠である。毎回、平均60名程の参加者の中で、同期卒業生同志の交流は自然にまかせておいても活発であるが、年齢の異なる会員間では相互交流を意図的にはかる必要がある。障害児保育施設の保育者や海外保育研修に参加した会員などを、時に応じて焦点化して紹介し、より詳しい情報・交流を求める会員同志の結びつきを促している。

また、保育歴4年以上の中堅保育者に成長した会員には、自由なテーマの基に、研究発表をする機会を設定するようにしている。このような中堅保育者の研究発表コーナーの設定は、発表者本人（先輩）にとつてのみならず、それらを聞く新任保育者（後輩）にとつても保育者としての成長とキャリア・アップへの意欲を相互に高める機会になっている。

⑧ 現職にある卒業生から、現場の抱えているさまざまな問題や、先への課題を提起してもらい、養成校側の教授内容へ活かす。

⑨ 在校学生は、卒業後も養成校とのかかわりが継続し、専門職に携わる現職者同志で研修できる場が保障されていることに安心感を持つ。また、適時教員によってなされる先輩の実践例などの会の報告には、強い関心を示す。このように、この会の存在は、在学生には専門職への志向を強め、勉学の意欲を高めるのに役立っている。

る。

⑩ 求職、転職などの就職相談や他の研究会の紹介などの窓口的役割も有する。

<本研修会の特色>

本会の運営

① 会の運営は、我々が主として決めているが、適時、学科のスタッフが自由参加し、研究交流ができるような、オープンな運営を心がけている。

② 運営上に必要な、事務の仕事（会員管理・会計など）は、毎年、幹事として、新会員の卒業生の中から、五名を選出し、ボランティアにより行なわれている。

③ 参加者は、当初卒業生の現職者のみであったが、現在は、現職者その他、再就職を希望している者、子育てに役立てようとする者、又、他の大学卒であるが、現場の同僚である本学卒業生と共に参加するようになった者など、さまざまな層の人が、参加できる場となっている。

④ 子連れの参加者が、研修しやすいよう、ベビーシッターとして、本学の在校生が、適時ボランティア役を果たしている。（その子供たちにより、幼児の表現活動研究は、その場で、子供の教材へのかかわり方などを、すぐ把握することができるなどの特典がある。）

本会の内容

① 活動内容については、事前に相談をし、毎回のテーマを設けている。季節や行事に即した歌や、表現活動・合奏や音楽劇など、保育に生かして役立つもの、また大きな目標を掲げて保育の中で継続的に積み重ねて発展させて行く基盤的で教育意義の深いもの、の両者を兼ねて二本柱を中心とした活動を、行なっている。このように、すぐ保育に役立つ教材などの提示と、長い目で見て保育者を育てて行く力となっていく教育的な基盤を培う内容とが、バランスよく織りこまれていくことをめざしている。

テーマ（例）

「保育にちょっとひと工夫」（昭和63年5月28日）

「いいことみーっけ！」（平成1年1月20日）

「一学期を省みて」（平成2年7月14日）

② 教材に関して、歌については、市販の楽譜を利用している。また表現に関する曲も、市販のテープや、CDを利用しているが、体を動かす表現については、我々がオリジナルに考えだしたものだけを提供している。

会員は、これ基盤にしてその発展の可能性や、バリエーションを楽しみながら考えだし、会員同志の創作へとつなげたりして行くこともある。これは、教材をワンパターンで取り入れるだけで終わることなく、教材に新しくかかわっていくという姿勢を、おおいに養っていく結果となっている。

<具体的展開例>

◎1986. 9月 第3回 参加者 28名 教員 ㊤㊥㊦

活 動 経 過	考 察
(1) <u>全員参加の活動</u> (a) 「大型バス」の曲に合わせて、いすとりゲーム。2組に別れて全員参加する。 指導㊤ ピアノ㊥ (b) テンポを変えたり、拍子を変えたり、色々な曲で、いすとりゲームを更に発表させて、全員で遊ぶ。 （例：4拍子、3拍子の曲に合わせたり、りすや、ぞうや、うまなどの動物になっていすとりゲームをする。）	○ウォーミング・アップを兼ね、参加意欲を高める。 ○保育者の資質を高める目的も兼ね、敏速に音楽に反応し、表現する自発性・創造性の開発。
(2) <u>物（ぼう）を使った表現活動</u> 「ぼうあそび」という曲を使い、ぼうを使ってあそぶ活動を、参加者とともに考える。 （例魔女、おさるのかごや、聖火ランナー、ウエイトリフティング、ヤリ投げ、おばあさん） 指導㊥㊦ ピアノ㊤	○参加者からのアイデアをその場で実践し、その活動の特色や、変化の可能性を考える。共に作る活動部分を大切にすることを強調。
(3) <u>観客体験を中心とした活動</u> (a) (1)と(2)を全員で動き回った後に、「ことりのはっぱ」「ドロップスのうた」の2曲を、座って、静かに聞いて鑑賞する。その後で、全員で歌う。 指導㊥ ピアノ㊤ (b) 「ことりのはっぱ」の歌詞に沿い㊦が表現活動へと発展させる。	○全身活動のあとの鎮静効果をも含め、日常の保育場面を設定しての指導訓練。
(4) <u>「音楽劇あそび」の実践例の報告</u> (a) 前回提示した「劇あそび」の発展的な実践例の発表「15ひきのこぶた」を、保育歴7年 S幼稚園4才児 吉田裕子に、前もって依頼しておく。 発表：幼児の得意とする歌、可能性を頭に入れ「3びきのこぶた」をベースに、幼児達と場面や、せりふなどをその時々により変化させなが	○保育現場での実践活動の発表に対し、そのクラスの集団の特性や、それまでの積み重ねについて、質問する。 ○言語レベルのみでなく行為レベル

ら、発表会へと導く過程を発表する。
 (b) (a)の全体の流れを発表してもらい、参加者全員で再演する。

で実践例を再演しつつ、新しい可能性も探る。

のXの自己の感じ方、状況の見え方、どんなことが変化のきっかけになったか等の内的過程を意識化する。

○短い場面を状況における物関係、人関係、自己関係において構造的に認識する訓練。

◎1989. 2月 第14回 参加者 35名 教員 ㊶㊳㊴
 幼児 年長2名, 年少1名

活 動 経 過	考 察
(1) 全員参加の活動 「もうすぐ幼稚園」の曲に合わせて歌いながら、踊りながら、全身で表現する全員参加の活動をする。	○ウォーミング・アップを兼ねた活動で、気分を一新し、参加意欲を高める。
(2) 前回提示した教材の応用実践報告 ㊶ 「こんなこいるかな」の曲で遊んだ発展例を、3, 4人のリポーターと㊳が発表する。 ○M幼稚園 田沼 3才児 壁のあちこちに歌の登場人物の絵が貼ってあったので、歌に合わせて、その絵の所へ走り寄り、タッチする活動が新しく加わった。 ○S幼稚園 高橋 4才児 幼児が特に好む「いたずらに拍子」という表現部分のヴァリエーションをクラス独自の表現に発展させ、更に、かけ声と返事と動きの組合せの、まねごっこ活動へと創造する。 例 ~ちゃんは、ウイंक・動作 ~ちゃんは、ひざポン・動作 ○K保育園 小林 1, 2才児 曲に合わせて、出席をとり、手をあげる活動。 例 ~ちゃん	○㊶と㊳はクラス集団の特性やそれまでの活動の積み重ねなどについて質問する。 ○実践活動で保育者と幼児の関わりにおいて新しく生まれ、共に作る活動部分をめだたせ大切にする姿勢を強調。
(3) メンバーXの過程分析 ㊴の㊶の活動場面で、あるメンバーXが課題のタイミングをつかむのに、手間取った場面があり、それを焦点化し過程分析をする。 ㊶ ㊴とXが対話をし、その場面で	○現場での発展例を再演し、その活動の特色や変化の可能性を考える。 ○日常の保育場面对応させて、今ここの共通活動における一場面を事例研究の対象とする。

㊴ Xのまわりのメンバーの状況のとらえ方、Xへのかかわり方を明確化する。

㊴ ㊶の講義

今ここで共に体験した一場面を焦点化し、明確になった具体的事実を保育現場のかかわり方にどう対応させるかについて説明する。

○会での体験・認識を保育現場へつなげる対応的思考の訓練。

(4) 楽器を使っでの活動

「10人のインディアン」の曲において、ボンボンや楽器を使って動きも楽しむ活動を、小グループごとに創作し発表する。(3グループに分化する)

○他のグループを意識しつつ、グループ内が凝集する。

㊴ ㊶, ㊳による楽器指導(タンバリン, 鈴, カスタネット)に関する講義と、各グループがその場で創作したものへのアドバイス、特に良かった点や、変化をつけるべき点などを、各グループに提示する。

○課題に夢中になるだけでなく、グループ内やグループ外の状況をどれだけとらえられたかの意識の分化訓練。

㊴ ㊶は、課題やグループへのかかわり方もパーソナリティーをとらせる視点になること、その類型を明示する。

(5) 手遊びと役割遊びの表現活動

「おはなしゆびさん」の曲を使用。 ピアノ㊳

○父の日関係の行事に向けての教材研究。

(a) ㊶が課題提起

「お父さんが何かやっているところを表現してみましょう。」
 上の課題に対して、個人個人で表現する。なかなかワンパターンしか出ず、アイデアが固定している。

(b) 変化課題の提起

「二人一組になり、一人は何か物になり、お父さんが何かしているところをやってみましょう。」

○㊶と㊴で相談して発展課題を提起し、劇的展開を促進するような場面設定を試みる。

例 ○運転するお父さんとハンドル
 ○鏡でひげをそっているお父さん

(c) いくつかのペアに焦点化	○今ここで変化発展体験を分析する。
(d) 課題の変化にともない、表現活動がどのように変化したかを明確化し、日常保育への対応関係をさぐる。	
所要時間 2時間半	

参加者の経験年数				
経験	1～3年	4～6年	7年以上	その他
61年度	82.5%	12.9%	4.6%	
62年度	72.7%	20.9%	4.8%	1.8%
63年度	77.0%	17.3%	5.4%	2.1%
64年度	77.1%	13.2%	7.4%	2.3%
参加者の職業の分布				
経験	幼稚園	保育所	一般会社	主婦
61年度				
62年度	82.4%	12.2%	2.4%	3.0%
63年度	84.1%	11.3%	2.3%	2.3%
64年度	71.0%	21.1%	5.7%	2.2%

<今後の課題>

今後の課題としては、次のような内容を考えている。

1. 長期的な共通の研究テーマを持つ。

具体的には、1990年度は「人とかかわりを育てる音楽活動」を共通の年間研究テーマに設定している。

2. 会員の研究発表を促進する。

現場の中堅保育者に育ったメンバーが中心となり、実践研究内容を発表するコーナーを積極的に設ける。

3. 実践現場に密着した活動内容を展開していく。

この会は現場の保育者を中心メンバーとし、毎日の保育現場の発展に役立つ、研究即実践の立場を貫いていきたい。

<研究協力者：坪倉紀代子>

Abstract

This is a report about our study and training activities for the graduates who are working as early childhood teachers.

The purpose of this is to clarify the function, managerial characteristics and the future theme of our activities.

According to the analysis of four years records, we have realized expectations and requirements for members.

They are divided into three as follows.

1. Professional training for skill and cognition.
2. Refreshment for member's mental health.
3. Providing various and new information about the work.

As the future theme we plan to share a continuous study theme and to expand the opportunities of member's original presentation.

We wish to develop our activities together with the graduates from now on.

